

ホ 2
396

東京大学
文学部
図書

11
196

結詞例

目録

凡例

曾之部 初丁 結むすびよか、そらざろぞ 十三ヶ條 二丁

乃之部 四丁 結むすびよか、そらざろや 四十三ヶ條 八丁

也之部 六丁 結むすびよか、そらざろ疑の例二十條 廿二丁

加之部 十四丁 結むすびよか、そらざろ疑の例二十條 廿二丁

何之部 二十丁 結むすびよか、そらざろ疑の例二十條 廿二丁

波之部 廿五丁 結むすびよか、そらざろ疑の例二十條 廿二丁

毛之部 廿七丁 別格 廿九丁

結詞例 目録

徒之部 三十丁 限林 廿五丁

を之部 三十二丁 別格 三十五丁

かも之部 三十六丁 せむいひのちさの同二十

あな之部 三十六丁 ちのち三十八

か之部 三十七丁 別格 三十七丁

都々之部 三十九丁 別格 三十九丁

くさぐさの疑詞 四十丁 や重 やト 疑詞重

くさぐさの自の詞 四十一丁 より同 ゆり

よりノ意ノ より よりノ意ノ より よりノ意ノ より よりノ意ノ より

禁同よ

くさぐさのとの詞 例 十四ヶ條 四十二丁

くさぐさのみの詞 例 八ヶ條 四十四丁

くさぐさの詞の例 四十五丁 せ けめ けれ てれ

くさぐさの格の例 四十六丁

上へかへりて切る格 四十六丁

重なるてみをはの格 四十六丁

二重よとのふるてみをはの格 四十六丁

一の詞よていひうけて二所よて結べる格 四十七丁

二の詞よていひうけて一所よて結べる格 四十七丁

結び詞をたきなながら下へつゞくる格 四十七丁

いひつけよて結び詞を畧きとる格 四十八丁

動うぬ詞よかりは動く詞をそへて結べる格 四十八丁

一ッの格 四十九丁 又一ッの格 四十九丁

過去のことを現在の詞よていへる格 四十九丁

疑ふべきてよをその格 五十丁

今世の人よ耳遠き格 五十二丁

をり ぞみゆ ぞけり ぞけむ

ごとく 物を意 物の とも

けく けく けく けく けく けく けく けく けく けく

く なるのうの なくは十四かぞなるととへむ

とへと 例てへえ さりよけり なり

一各い助辞の首よ古同上あるせはひつき集以つきひよのみあ

のと通なり、今とふるく かるく かるく やんくみある格

わくく つかぬく ぬるく 志くく 格とあ

まにく きて むの

ありよつく詞を第二句の頭よたける例 五十八丁

序をおきとるまぶとの例 五十八丁

結詞例 凡例

一各條の首は古と志るせは、萬葉集以往の歌のみある格なり。今と志るせるも、今京以來の歌のみある格なり。何とも志るざるは、古今相通をいへる格と志るべし。

一「幾丁」二「幾丁」とのみ志るせるは、万葉の歌なり。記と志るせるは、古事記、紀と志るせるを、日本紀なり。其他書名を畧き書ることあれども、まづふ了ドけれを、こゝよことわらば、

一萬葉集の舊本、其他の古き書は出とるは、字の誤訓のと

Handwritten examples of kuzushiji text, including various characters and phrases, likely illustrating the 'kuzushiji' (old script) examples mentioned in the text. The text is arranged in vertical columns, with some characters appearing to be examples of specific characters or words discussed in the text.

かひなどのいちしるきをば、改めて引とるもまれくあり。
疑をしきをば、本書よつきて考べし。

さ界も書のことおひさよまらふむらりむらりむらりむらり
させさの古事時流しよさせさの日本時流しよさせさの
一書下二書下三のなまのさよふて禁の解なり、あつた
るべし
さの解ふよまのさよふの古今時流しよふの解ふ
さ解ふの今よまのさよふの今京よまの解ふのちよまの解
一各解の首よ古よまのさ解の真業兼心解の解ふのちよ
ふ

結詞例

藤原雅澄 撰

曾之部

く

古今 あつたきのみぎのなねのきもいそぎまみづのいぬよふれそをさうく
をちかしのあつたのきもいそぎまみづのいぬよふれそをさうく

す

古今 たちうらなみそそをそよ玉かすすれいせきあべんごつせあれは
大世帯 あまつみづあふぎこそまつ

つ

後撰 あまの川いとこほなみのこらあつあきの七日のけふをそまつ
二十 あつちりぬまひぬをそこあつちりぬのうららのひまをひらぬ

ぬ

古今 さくらをなをちりぬともたもあえず人のころそかせもふまあぬ

まこと万古人のよみとる例の後世よまれて傳をらぬよ
こそあらめ古風の歌なりとてよむまどきよあらざれ
む古今相通の例とす後皆これに准ふべし

○以下むすびよか、をらざるぞの詞の例をいだし

切れぞ

三十一 ありてはらふまもみさうしよかあつむおまぞいのむせらうのう
三十一 ものふれおみのをこひにちかきみのまけのまひへちんちよものぞ

わ

三十一 上のちりひひのこをこおまおすれまこぞひひあぬひをひやみ
古今 わがこひゆへもまらするこまなあはさまらうとたわおらうぞ

問かえぞ

三十一 ひとかみのいひはまねんれゆきまをまらるよひおけすねむ
後撰 をるやういひむらういひむれういひまらひひのこをちかおまぞ

龍田風神
祭祀詞

多へことをへまつらむとれもほめすをいづれのかみぞ

同上
ぞも

四十九 よくわらうひとらうよもあつちをらひはぬいづもあひいひまはる
同廿三 つるがいらみかしのさむこいあはぬつあふのまらぞよまみよあんとあ

三十一 わがやどのこがひひはけいづきぬまをちねまみもなぬこらぞも
三十一 とうわらうまこもひひあつちをらひはぬいづもわがこひよける

十六 いろおせるおせのうらぞもこいひおきまがみせむとつれをこむむる
十四 けいもいひのらうらなはあせぞもいひすうらまかぬ

後拾遺 いそぎつひれいそまづれあまなこみしつうをめるあまのつきぞも

添
ぞも

十五 ちまちちあまきまのぬまのぬまなきのまなぞもいまぢちうげける
十五 ひとよりそいもぞもあまきこひもなへあつたまものをたむらめつ

結詞例 結びよか、をらざるぞの詞の例 三

三三三 なをぞもあふよまをちゆあをぞもなふよまをちゆ

記 みのちのこはだをとめいあらそがねくをぞもうるがみ思ふ

四里寺 こひをいまとあらどとあれをなまひをいづくのこひをつらみかきる

ナサ分 あぢまぢーあまきまうぬいもとあれまふことあれをひよらうまぢ

ナサ寺 いれそこのまぢやんまぢまぢらちねのまふいろまをものまあれを

苗七丁 まま川まぢらほつらうまらうまあふをこのまけこたかあーま

同サ丁 んんをこのまのとおさぶるふぢまみまわぢせをやりていふこのを

サ十丁 まぢぐーの花いぢまぢどあまれをまこまあれのさたでこぢま

記 みるーぬのをむぢぢけまぢふまをこんれをわぢま入ままをい

催馬樂 んれをこのまのひとこまみまのまぢせうまこーまぢらひまぢ

伊呂波歌 わぢよんれをつねまらま

ろ意そ

や何ぞ

古今 いのちをなふぞこつめまぢものをあまよーか入をくからなく

ぞこれ

六サ分 ままらをのこのまこまぢませめれまぢまぢけるまぢまぢぞこれ

九サ分 いかへのまぬだまのひまぢいーうなひまあまぢまぢぞこれ

サ十丁 あーひまのままゆまーうまま入のつれまぢめーままづこぞこれ

古ぞや

記 あぢーまあひこねのかみぞや

今ぞや

新勅 いのなりーまぢまぢぢぢぢぢぢぢまーこままぢま入まこままらねま

今むやそ

拾遺 こーはありてひとよいもよあふひこまーまらねまぢまらりておのらまぢ

む

古今記 みるのよほのまのうめのかんなはのほのちかひあいのゆまひを

今

む

大和物語

むすむすのよほのまのうめのかんなはのほのちかひあいのゆまひを

る

古今記 みるのよほのまのうめのかんなはのほのちかひあいのゆまひを

今

る

菅万 みるのよほのまのうめのかんなはのほのちかひあいのゆまひを

現在
ま

古今記 みるのよほのまのうめのかんなはのほのちかひあいのゆまひを

さ

古今記 みるのよほのまのうめのかんなはのほのちかひあいのゆまひを

も

古今記 みるのよほのまのうめのかんなはのほのちかひあいのゆまひを

ら

古今記 みるのよほのまのうめのかんなはのほのちかひあいのゆまひを

也之部

く

古今記 みるのよほのまのうめのかんなはのほのちかひあいのゆまひを

す

古今記 みるのよほのまのうめのかんなはのほのちかひあいのゆまひを

つ

源氏 みるのよほのまのうめのかんなはのほのちかひあいのゆまひを

ぬ^不 四幸^子 みやごぢきむ^やか^らみ^のい^のう^らけ^ひてぬ^れどいぬ^みえ^こぬ
古今 つまやあらぬ^んち^むの^らぬ^らね^し我身^いら^んな^らぬ^みあ^の

ふ 後撰 かむ^らう^しか^きつ^つも^かも^らぶ^むぢ^のが^かい^ちよ^なへ^んい^しの^けり^お

む 續千載 よものう^みふ^ちか^むも^あま^のい^らう^らか^んと^かい^のま^げき^をあ^つじ^に

む 二廿八^今 みぢ^いぬ^のゆ^のあ^らけ^はけ^よま^んぢ^のひ^もあ^がひ^らね^む

も^ら意 拾遺 よそよ^のこ^みや^をこ^ひむ^いら^るの^まあ^つむ^花の^うら^よい^ずえ^と
四世^子 あひ^おも^とね^んを^やも^こな^きう^らい^のそ^こひ^つま^こよ^ねの^こさ^らも

む^ら 古今 な^まき^うら^から^のな^みぢ^ちお^ちつ^らひ^の思^いが^らの^まき^のう^らの^うら^い

る 後撰 あり^みて^いち^せせ^いなる^なさ^もも^あた^かい^のか^いの^まき^のう^らの^うら^い

る 古今 秋^のさ^れの^うら^いを^さら^いな^づま^のい^らり^のま^こい^のん^なわ^もろ^い

現在 後撰 あり^しも^よせ^らい^のあ^まの^うら^いの^まき^のう^らの^うら^い

過去 二亭 い^あら^むら^いの^ほな^きけ^だわ^かさ^かい^のあ^らむ^らい

ま^い 古今 なる^れが^から^いち^{あり}ま^らゆ^みぢ^のう^らの^うら^い

ら 九聖 かく^すま^ゆけ^いあ^わや^みの^うち^よぢ^りな^らわ^むこ^ろな^み

後拾遺 き^つる^やつ^ねる^うら^いほ^とき^す老^いね^がめ^れら^れかり^ける

○以下むまびよか、さらざるやの詞の例をいだし

やも

ナサナ まみのえはこままのまびよみあけむみすこむりのみやもひひんつなむ
ナサナ せのしほまにむまはいろさとのしほまのまむせやもさつちなひんつな
ナサナ ままのしほのいろさつちなひのいろさつちなひのいろさつちなひのいろさつち
ナサナ あまのむのかんむくつちのいろさつちなひのいろさつちなひのいろさつち
ナサナ ほろまのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
ナサナ ままのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
同サナ まむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
記 まむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
菅方 なりのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
後撰 かげならむまむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち

問カス
や

ナサナ まむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
ナサナ まむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
同サナ まむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
記 まむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
菅方 なりのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
後撰 かげならむまむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち

やも

ナサナ あーじきのしほまのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
ナサナ ままのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
ナサナ まむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
同サナ ほろまのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
同 あれさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
同サナ かむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
紀 わたのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち

切とや

同サナ あれさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
同サナ かむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
紀 わたのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち

き

大和物語 んれまのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
三三三 なむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
四三三 まむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
八三三 まむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち
十三三 まむせのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつちのいろさつち

まやハ

古今 いそのみみちのなすのみちなるつふみぎのこひりとおもひまやハ

反ル意ノ
や

二十 みる山を志すもかくきつくとだよもころあはなむかくさふばや

同 あいのちすむらちたぬのちまもあなぬのいみぢかきみよとてや

紀 こなきてころちのあそみならぬちいふいふあれやちあななれそ

反ル意ノ
やも

古今 こまねていゆめつらそおもひたよひちやゆきふゆはてきたまひい

六廿 なのこちもむぢうつづきよつづよにかりつづきまをいんてすうて

ケハニヤ
けや

七十九 ねまらちこつむまねちちせんもまきまされろくまよせめやも

セハニヤ
せや

九十九 せうへよなるつあめけやがころもあまきとれぬやまにまむひと

四廿二
やハ

あひのこよとよむあはちむかひのちあはしむあはしむあはしむ

五
やハ

四十三 まぬのうらけよのいけかへしむらぬあや/あそぶあそぶあそぶ

ハ
や

一廿 ねちよのみのつうたまあつたれがひりなるいもをわすれおあハ

ニヤハ
めや

四廿 かわぬゆきをのれつぬのいれまもいりるをひまされておあハ

ニヤハ
めやも

二廿 ねちよのちよちいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

ヤハ

古今 うるやういあまなまなまなまなまなまなまなまなまなまなま

一廿 むらさきのあやういよをよふあういひんつまゆをよあがこひめやも

古今 やまのたのおとをの山れおとよだひいあーちんくわあこひめやも

續後紀 ねまねとてわびやをらひつへつちよもてのちのちよもてまひてむ

古今 おむひけむひとををともよおむてまーまさうちむくいさうりけりやハ

やハと云るごと、万葉以往の歌はな人九廿八下、松反

四臂而有八羽云々とあるのみなり、あられども、其歌誤

字多くと見えとれば、信がと。十七よ、麻津我弊里之比
尔底安礼可母と云歌あれば、八羽ハ、八母の誤ならむと
云説あり。

古
願
や

三三
かろせのさむきつせをなげきつきみぢあつふうらひとあへや
四六
あつちちのひんもむむもあれやとんのあつちちこれだ
六六
あつちちからよのまにきまみきうふもあれやの人もさうむ
七世
いそらのをぬあきづふちちのこもあへやとまをまむ
七二
ねむまのよのいぬをみえつけやそをいひあつちちあつち
七九
いなむもほりけまめくゆかすきかちみえやもあれもすりなむ

古
同上
やも

紀

わいへまみむあへやむいさかろらうのたまのよのあつち

今
同上
わや

古今 さつきづなきもあつちまほきまうきかこのをきらや

れ
や

うちそを、みのねきみあまなれやうらごのまのこまもあつち
同七
いあへのいとふりれあまやうなみのあつちみやをみればあつち

チ三
むーきのねちみあつちとまあれやうめをかばてあつち
後撰 よのあつちものなれや人ごとのあつちあつちあつち

今
れ
や

新古今 あげまこのけきまのみのなれやそらゆつちのあつち

何
れ
や

後拾遺 わごまかこつちあつちあつちあつちあつちあつち

古
を^{ヨリ}や

十廿下 ちのつひとほろぎしをわめづらへんまをなごのうーたひつゝをまを

を^{ヨリ}や

九廿下 ねれるてわまをちこひむいなみぬのあまきふぎみついなむこのあふ
おれあてつれいやこひむさるあすみふれびくやまをまみあごこえいなむ

古
を^{ヨリ}や

紀 ぬまのみすまらのおまふしあふや
つゝのつれをちぬ

記 ぬまきこひびこさや

同 つごのちむたのいひかごひへんぬまをちぬあふいぬまを

同 ちまだけのまみまをちぬ

記 をちぬまのへんわをちぬへんぬまをちぬあふいぬまを

歎息^ノや

四廿下 ちぬまをちぬまをちぬまをちぬまをちぬまをちぬまをちぬまを
九廿下 ちぬまをちぬまをちぬまをちぬまをちぬまをちぬまをちぬまを

詠^ルや

十六下 ちぬまをちぬまをちぬまをちぬまをちぬまをちぬまをちぬまを

古今 つれをのそあひあつるあふまをちぬまをちぬまをちぬまをちぬまを

七廿下 あふみのやちまのまぬまをちぬまをちぬまをちぬまをちぬまを

紀 いらふゆをちぬまのまぬまのやちぬまのまぬまのまぬまのまぬまの

三十八下 ちぬまをちぬまのまぬまのまぬまのまぬまのまぬまのまぬまの

十六下 あはあつちぬまのまぬまのまぬまのまぬまのまぬまのまぬまの

記 ちぬまをちぬまのまぬまのまぬまのまぬまのまぬまのまぬまの

五十六下 みれとのやあふちぬまのまぬまのまぬまのまぬまのまぬまの

古今 ちぬまをちぬまのまぬまのまぬまのまぬまのまぬまのまぬまの

や^ノ

一廿下 ちぬまをちぬまのまぬまのまぬまのまぬまのまぬまのまぬまの
二廿下 あまをちぬまのまぬまのまぬまのまぬまのまぬまのまぬまの

四廿三 あまをがやうののみちあり
 十廿六 りまらぶがやかまのやうらほくまのしんすんはまのあまのしんすんはまの
 八廿八 あまをがやひたのしんすん
 二廿四 かーんちやみまのしんすん
 九廿二 のーんちやかまのしんすん
 十廿一 かーんちやあまのしんすん
 廿五丁 のーんちやあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん
 八三丁 うんちやあまのしんすん
 十丁 りまらぶがやあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん
 記 うんちやあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん
 廿五丁 りまらぶがやあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん
 六廿丁 りまらぶがやあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん

廿六丁 おーんちやあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん
 記 おーんちやあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん
 十六廿丁 あまをがやひのけはまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん
 記 りまらぶがやあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん
 同 つまねがやあまのしんすん
 同 りまらぶがやあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん
 紀 みちあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん
 廿七丁 りまらぶがやあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん
 廿八丁 りまらぶがやあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん
 記 りまらぶがやあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん
 廿九丁 りまらぶがやあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん
 三十丁 りまらぶがやあまのしんすんはまのあまのしんすんはまのあまのしんすん

古九下 さをーのよあすやんちんらなせびとまらりいぢあまよのんーそーも
 記 わちちのああやをちあせなすいぢいぢあまのらぢいぢあまぢあぢあ
 同 みもろよいぢいぢあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま
 古今 ぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢい
 四下 ぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢい

又一種 紀 かむいぢのらせのうまのおほいーそせらとひとこちろ

又一種 十六下 さらぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢい

又一種 紀 わみのぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢい

ヤラン 五下 ぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢい

カワル 風雅 なあぢあぢあぢあぢあぢあぢあぢあぢあぢあぢあぢあぢあぢあぢあぢあ

ヨノ意 二下 あれいぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

記 たきめぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

呼カケヨノ意 十三下 ぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢいぢい

五下 なせのこぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

も

ハ辛子 ちの山のまののねまき *chi no yama no manonone* まきの *ma* の *no* 山 *yama* の *chi* の *ha* 辛子 *shinji*

め

十辛子 志だの浦を朝ぐふねいよな *shida no ura o asagufune iyo na* 朝 *asa* の *ura* の *shida* 志だ *shida* の *ura* を *me* 浦 *ura* を *me* 朝 *asa* ぐ *me* ね *me* い *me* よ *me* な *me* 朝 *asa* ぐ *me* ね *me* い *me* よ *me* な *me*

む

十辛子 ちまへくもゆきてみ *chimahekumoyukite mi* ち *chi* ま *ma* へ *he* く *ku* も *mo* ゆ *yu* き *ki* て *te* み *mi*

る

十辛子 くれなるのこそめ *kurenarukosotome* くれ *ku* れ *re* なる *na* る *ru* の *no* の *no* こそ *ko* そ *so* め *me*

き

十辛子 ねむころよか *nemukoroyoka* ね *ne* む *mu* こ *ko* ろ *ro* よ *yo* か *ka*

過去

十辛子 ころ *ko* ろ *ro* ね *ne* む *mu* こ *ko* ろ *ro* よ *yo* か *ka*

ま

十辛子 ねむ *ne* む *mu* こ *ko* ろ *ro* よ *yo* か *ka*

ら

十辛子 ねむ *ne* む *mu* こ *ko* ろ *ro* よ *yo* か *ka*

以下

下くさぐの *shimo sagu no* 例を *rei o* くだ *ku* 下 *shimo* く *ku* さ *sa* ぐ *gu* の *no* 例 *rei* を *o* くだ *ku* 下 *shimo* く *ku* さ *sa* ぐ *gu* の *no* 例 *rei* を *o*

問

十辛子 うけ *u* け *ke* こ *ko* ろ *ro* よ *yo* か *ka*

切

十辛子 あ *a* の *no* う *u* ら *ra* よ *yo* ら *ra* の *no* つ *tsu* せ *se* ら *ra* む *mu* を *o* ら *ra* の *no* 玉 *ta* も *mo* の *no* ま *ma* こと *ko* じ *ji* を *o* ら *ra* の *no* 玉 *ta* も *mo* の *no* ま *ma* こと *ko* じ *ji* を *o*

切

十辛子 み *mi* こ *ko* ろ *ro* よ *yo* か *ka*

サ六十 ありしものすまじりかむらさきのあはれさのさびしきものさすけり

切あハ

古今 こゑこそげまきけろひをいひてせよあはれびとだてんげきまろは

歎息の

古今 いめよだよみぢりとのをたかしくみぢもまゐるさちひのんまみ

同上の

古今 あらみぢりいさよひかけしきちのゆをしまもゆけんまのあま

との

古今 わのそらよせくこなみのまをいもみまへのかきまじりま

ま

サ六十 あまのぬみしものさすまじりかむらさきのあはれさのさすけり

がふ

四廿一 わがやどのゆふげんまのあつゆけねのふもくれおもふゆのち

古がね

古今 さくら花うらひをれいらのこむとらふさうみちまががふ

按よ。がよがねのがハ。自餘のがとハきよくかたりとれ
バ。こ、小あぐべきよあらざれども。世の人おもひまど
へろのゆゑよ。志むらくこ、よいごうて。いさゝあおど
ろのさむとす。抑がよハ之似るねハ之根の意にて通ハ
し云べき理なきを。今京よりこのうら。がねの詞ハうせ
て。がねと云べき所をもるふと云て。一。小まぎらハ一
ろより。それふまよひて。古き書とくひとも思ひこがハ

結詞例

この意
このも

十三 草 あらそめはわたらのこころもあきららうふおなひていもよあはむものも
サシキ きみづの池のまらまぬいそよせまむびへみともあうじきみらも
同六 十 こころまのぬへをくむのすきつひよちよにわすれむらうおる君のも

この意
この

十四 草 はづめよりなごのいひつゝのめすかへちおひよわたま〜もの
古今 たいぬとてなごころうらみさせあぢけむおいすけふよあま〜もの

この意
このハ

古今 いのならむいそわたのさふふをまぶらかすよのいそいものいそいそい

この重

十五 草 ちたのうらをあたふふむらむらふふふふふふふふふふふふふふふふふ
十六 草 ちたのうらをあたふふむらむらふふふふふふふふふふふふふふふふふ

このも

このも
切ル、
このも

十七 草 みちのくはあ〜らまゆみ〜きおは〜せらまゆみ〜つら〜めかむ
同廿三 ねがぶをいゆさなもか〜め〜そのま〜ごとあらを〜め〜も
サセテ あちをれのさ〜ふ〜のさ〜ん〜し〜ん〜のま〜を〜し〜ずあらめうち
古今序 いふ〜をあら〜して〜まを〜い〜ひ〜ら〜め〜も

今

このや

拾遺 かな〜うや〜のま〜い〜い〜おを〜えてあや〜〜のな〜こそすれ

古

この
い〜残る

ニセテ あめけら〜よものい〜のねがぶ〜のおま〜ひ〜のみてあま〜つ〜つあ〜ぶ〜
てまつよい〜のさまに〜おむか〜めせの
同甲 十 あま〜のま〜い〜い〜もあ〜よ〜けの〜を〜い〜ら〜い〜の〜さまに〜おむか〜
をれる
ハカナク消失ケム

ニ辛亭 うちひさすみやこさみふさといふをさはふあれどもこのさまふおも

ひけめるも

カヤウノ地ニ家造シテヌマヒケム

同平今 いやひけはゆのさかむなよづれのいづこかむ カヤウノ告ハアルナラン

ナラサテ むらねのちよぶなをまよめどみちゆきひとをくれありこの ナラマシ

ナラサテ みなとあはらみむひろしむしりのたまもこのことをもまを ナラマシ

ウベモ行宮ヨツクリ仕ヘマツリケン

同サテ さまのまのまことのいづいこのさまにおもかめせの カクハカサクナラセタマヒケン

オサテ ねよづれのことこのものは一きよくなおこのみことなふのも ナラマシ

キノナツカシキ時ヲオキテスギニケン

記仲衰 このみきをのみけむいこのつぐみうすふところうつかみけ

メデタクアルラン まひつかみけれのも ウマクアルラン

按ふ上よりそのこそなどの詞よてかゝりて下よその

結び詞をいえず言の外よぶくみ持せよること古風の

長歌又多しその歌を全らあぢむひ見ざれば分りがと

むむ

けれど今所せけれをそのかたへをのこあげてひつぐ

むむ

あつきのこのまもちかひかかかかかかかかか

な

みづほふふめうらみけいしういもくもくもくもく

な

ひもこのかみのねづけだーくもこのみちもくもく

な

あめつこのついでいしういしういしういしういし

な

くたりのこのめいしういしういしういしういし

ハシカ

四三三 天の川に身をまかせてはなれぬとて

及カ

十三 天の川に身をまかせてはなれぬとて

不カ

同三三 天の川に身をまかせてはなれぬとて

畢カ

同三三 天の川に身をまかせてはなれぬとて

カ

二二二 天の川に身をまかせてはなれぬとて

願カ

二二二 天の川に身をまかせてはなれぬとて

カ

三三三 天の川に身をまかせてはなれぬとて

カ

三三三 天の川に身をまかせてはなれぬとて

カ

四三三 天の川に身をまかせてはなれぬとて

カ

五三三 天の川に身をまかせてはなれぬとて

カ

六三三 天の川に身をまかせてはなれぬとて

カ

七三三 天の川に身をまかせてはなれぬとて

一い

五十一 いのちをいふはあはれなりけり
六十一 いのちをいふはあはれなりけり
七十一 いのちをいふはあはれなりけり
八十一 いのちをいふはあはれなりけり
九十一 いのちをいふはあはれなりけり

い

十 四十 いのちをいふはあはれなりけり

何之部

く

古 今 くちすのよはうはあはれなりけり

す

十 世す つかやぶよりあはれなりけり

ド

十 世ド ほとぎすまうたあはれなりけり

つ

十 世つ くれきつはあはれなりけり

ぬ

十 世ぬ いめだまなどらもえぬみれどもあはれなりけり

ふ

十 世ふ さなみのねちやまもうたあはれなりけり

む

十 世む くれきつはあはれなりけり

む

古今 なつてよむ てちのむ むらさき のむらさき のむらさき を

む

古今 れい を あふ むらさき のむらさき のむらさき を

も

古今 を あふ むらさき のむらさき のむらさき を

め

古今 あ むらさき のむらさき のむらさき を

る

古今 な れ ち ら す むらさき のむらさき のむらさき を

今

る

大和物語 み も こ え に い れ と あ り て あ ら る むらさき のむらさき のむらさき を

現在

古今 さ だ の う ら に あ ま る むらさき のむらさき のむらさき を

け

古今 あ ら る むらさき のむらさき のむらさき を

過去

古今 こ ら ひ め か み の み と の な つ ら は と み と せ り い を と れ み き

過去

古今 あ れ そ こ ら り

ま

古今 い も あ ら る むらさき のむらさき のむらさき を

ま

古今 ら め づ け ら な け ら むらさき のむらさき のむらさき を

結詞例

ら

壬生集 あづまぢやとづなものをちちていへるゆきのまことより

○以下むをびよか、もらざる疑ひの例をいだけ

何

四聖寺 あひみずていづくひまもあらなくもいづくあれはいつともあつた
同聖寺 あひみずをいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくも
五ノ九寺 さねよのいづくもあらね
九世寺 いづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくも

何

七世寺 さねをめていづくもあらねいづくもいづくもいづくもいづくもいづくも
十世寺 いづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくも
寺今 いづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくも
寺世 いづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくも

何

七世寺 といづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくも

何と

古今 玉はこのみちの人のいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくも
古今 あきのせよまのこはのうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

何とも

寺聖 わびむいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくも
あんとこの意

何

八世寺 いづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくも
古今 つのこおれなうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

何

七世寺 わわうみのなみあゝこゝあゝれどもいづくもいづくもいづくもいづくも
同世寺 なみあゝいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくも
十六世寺 こゝろのいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくもいづくも

何^{他云}

古今 ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう

何^願

古今 ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう

何^{せむ}

古今 ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう

何^種

古今 ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう

何^す

古今 ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう

何^ぞ

古今 ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう

何^ぞ

古今 ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう

何^ぞ

古今 ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう

何^ぞ

古今 ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう

何^ぞ

古今 ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう

何^ぞ

古今 ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう

や何ぞ

躬恒集 ゆきやらぬしうちたふぞあまのつみちちとせとあらしとたふよを
四廿八丁 こふあつこしーちこづーきらむのいれびくちまのかんやーあつらー
八四丁 ちよあつこかきまあづーあまづみらぐーあわなひつぞをほ
古今 こまづらひのちあまづらひのちあまのちこわけあまふ出さけり

や何

三廿丁 こふあつこしーちこづーきらむのいれびくちまのかんやーあつらー
をやく加之部よ出す

やも何

三廿丁 こふあつこしーちこづーきらむのいれびくちまのかんやーあつらー
をやく加之部よ出す

何の

ナニノ意
あよ ちよあつこかきまあづーあまづみらぐーあわなひつぞをほ
三廿丁 あつこかきまあづーあまづみらぐーあわなひつぞをほ

波

同業 よらひのちあまづらひのちあまのちこわけあまふ出さけり
四廿丁 やあつこかきまあづーあまづみらぐーあわなひつぞをほ
紀 ならむのいれびくのちあまづらひのちあまのちこわけあまふ出さけり
六廿丁 ああつこかきまあづーあまづみらぐーあわなひつぞをほ

一種あふ

又一種あよ

波之部

七廿丁 ああつこかきまあづーあまづみらぐーあわなひつぞをほ
八廿丁 ああつこかきまあづーあまづみらぐーあわなひつぞをほ
古今 のべちうしをーをらぶらぶひものちあまのちこわけあまふ出さけり

す

昔草 いのふーこひちむのぞなむつちれつみをいのねどあをとおひます

ず

紀 いなむーろろそそひちあぎみづゆけびまかまじちそのねうせす

づ

古今 ゆめぢよいあーむすあすのよんちうつにひちあめーこいあらす

つ

詞花 あき山の志みづいこまづよづうなむやぶつきのこわりのぞさしあ

ぬ

古今 たものばよわのなつまむいこいものさちうつらなむねんらむいぬ

ふ

金葉 くもりなきことのもあういあみなるあまのさうらひのうらけしうら

む

伊勢物語 いちのおほききむのしはれいこちあひのあはれさかたむいさうら

む

古今 きみぢゆいこいのきららむまきらむいひのあはれさかたむいさうら

な

古今 らまされづひもあぬるものされづいのよあひまらむいさうら

む

古今 きりうちてかりぢあへなるかなをうけあひのめをらうまむぢまぬらむ

む

古今 春よてばきゆのこちれけうあく君のらうらむれよんけむむ

も シ意

西寺 かみつけぬをぬいごころのがたぢよもころいあをなぬいころのみとて

ゆ

一サテ あへゆかむをさひよまゆりてむきるゆりちよまておむかゆ

ろ

拾遺 やまごのいなるかきみこめうたごかきねのおかきまきまきこみゆ

り

言華 りめつちれかをもあれいのつてきいひちよものかひつてまますけ

き 過去

古今 ろくさうなうふーなられぬおこひいろをかそららびすれらさきけり

い 現在

後撰 かせふもなふらまらせむいんらぞれよちひあうぬあちうかうかき

過去

二世下 たまつものなびまーいもむもみちぞのまきいんかひんかひん

ま

吾サテ いへありてそごのどろみぶなぶさむころちうあらまーきたまぶまゆと

ら

古今 よのなるにこえてさくらのはるりせぶをるのころそものごけのらまー

も 添

七四下 ゆきかゝるものさひちもかたもいんよまかえむころまらでんら

毛之部

く

六帖 ころも川いろくれなふふきつよけりやまのむみぢもいまをちうち

古今 ちどりなくたよりのかたけのいよひのしほのうせとくすのちかきうりて

す

古今 ちどりなくたよりのかたけのいよひのしほのうせとくすのちかきうりて

ず

古今 ちどりなくたよりのかたけのいよひのしほのうせとくすのちかきうりて

い

古今 ちどりなくたよりのかたけのいよひのしほのうせとくすのちかきうりて

つ

古今 ちどりなくたよりのかたけのいよひのしほのうせとくすのちかきうりて

ぬ

古今 ちどりなくたよりのかたけのいよひのしほのうせとくすのちかきうりて

ふ

古今 ちどりなくたよりのかたけのいよひのしほのうせとくすのちかきうりて

む

古今 ちどりなくたよりのかたけのいよひのしほのうせとくすのちかきうりて

な

古今 ちどりなくたよりのかたけのいよひのしほのうせとくすのちかきうりて

む

古今 ちどりなくたよりのかたけのいよひのしほのうせとくすのちかきうりて

む

古今 ちどりなくたよりのかたけのいよひのしほのうせとくすのちかきうりて

む

古今 ちどりなくたよりのかたけのいよひのしほのうせとくすのちかきうりて

ゆ

金葉 ゆきとらもまのひもをそはうはとれくろれをつきのかけとるぬ

る

後撰 ゆぐれいまつよもかゝるちらつゆのおとあゝやきをえいとらむじ

り

十聖寺 志づれのほめまなくいふれがまきのともあらそひいひてうらまほけつ

過去

古今 なふをあらうならはてしひつゝあつゝまをくまのみをなふいんひつ

現在

拾遺 かんざつひひつひつものそむおとをむむらぶおのむらぶおのむらぶおのむらぶ

ま

續紀 うちむせむしよへちあけしをうらむとちとせをまちとすめひをそのも

ら

古今 わのやとゆきとちうらむきてなむもあゝみわけとていひていふけれぞ

以下別格のものをい

だす

難意

新古今 ちらむせのふくむちちらなるむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

モノ意

十八幸 あいおもはげあつらむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

同書

同書 志らむまのいおしほむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

モノ意

十九幸 いへゆきとなふをかちらむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

同書

同書 あまむせをほらむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

大ナナ みるまぬふかまみしなびまきさのくろかきのくまけいもゆきをさうつ
同十ナ ともーびのじろうよみゆつきゆりなれゆりもあえむとちむひそめま
同廿六ナ あくさよもかゆもよちもあしとあれあつけぬーのとれどふ

廿八ノ意
も

四廿四 あまのものをふみーなりむかひのくろくろもみかんよりおーものを
六廿六 こころをえそなげけういふまきのくろくろもかきむのびのみきりけり
同廿八 こころをれんをなよもみよもみりなもくろくろもかきむのびのみきりけり
十九廿九 ちかきびんをさうつよもちつよけのくろくろもかきむのびのみきりけり
同廿三ナ ふぢなみのかげあうみのくろくろもかきむのびのみきりけり
ニナナ あれいもちまきまみしなびまきさのくろかきのくまけいもゆきをさうつ

もや

もよ

五七ナ よのなごいんかきとくろくろもかきむのびのみきりけり
六廿六 ちだのうらゝあしんべんをさうつよもちつよけのくろくろもかきむのびのみきりけり
同十ナ あーがらあまのあまよいんかきのくろくろもかきむのびのみきりけり

シノ意
も

廿廿六 わがいをろよゆあむいんかきのくろくろもかきむのびのみきりけり
此外をやく世之部何之部よ出せり。

歎息
も

千載 ひともうなみせもさうせむもさうせむもさうせむもさうせむもさうせむも
一十七ナ さくなみのくろくろもかきむのびのみきりけり
同廿四 あきむよーかきむのくろくろもかきむのびのみきりけり
同廿八 もまもろくろくろもかきむのくろくろもかきむのびのみきりけり
ニ廿六 あき山のくろくろもかきむのくろくろもかきむのびのみきりけり

古今 あーよりんもろをきーていんいりけりあまなむらむけむかきーも

あし九丁 いろしちしむろふひけーんあまなむらむけむひろりくろしあも

徒之部

あし廿丁 はしんいりあきーにのけりあまなむらむけむひろりくろしあも

あし廿三丁 をとめけりあまなむらむけむひろりくろしあも

あし廿四丁 あまなむらむけむひろりくろしあも

つイニ終ル

古今 わがしんうらなむらむけむひろりくろしあも

あし廿五丁 あしひきりあまなむらむけむひろりくろしあも

あし廿六丁 あづさゆみあまなむらむけむひろりくろしあも

あし廿七丁 くらうーのうみれあまなむらむけむひろりくろしあも

あし廿八丁 あらすーてわうーかみだんきりあまなむらむけむひろりくろしあも

あし廿九丁 ひいりあまなむらむけむひろりくろしあも

あし三十丁 きだなあまなむらむけむひろりくろしあも

あし三十一丁 みれであらぬよーぬけのいのたあけんぬろこたうまかづみむ

あし三十二丁 やまごみひとむまあまなむらむけむひろりくろしあも

結詞例 徒之部

あし三十三丁 ゆきあまなむらむけむひろりくろしあも

あし三十四丁 ままあまなむらむけむひろりくろしあも

あし三十五丁 後拾遺 いとくしあまなむらむけむひろりくろしあも

む ナ ^ナ ナ
 七十五 ナ ^ナ ナ あてまきしんしほあまのんらちちあすあさなむかろくしむまひ

ゆ ナ ^ナ ナ
 七十六 ナ ^ナ ナ こまむのちあてあまのんらちちあすあさなむかろくしむまひ

る ナ ^ナ ナ
 七十七 ナ ^ナ ナ こまむのちあてあまのんらちちあすあさなむかろくしむまひ

り ナ ^ナ ナ
 七十八 ナ ^ナ ナ こまむのちあてあまのんらちちあすあさなむかろくしむまひ

過去 ナ ^ナ ナ
 七十九 ナ ^ナ ナ こまむのちあてあまのんらちちあすあさなむかろくしむまひ

現在 ナ ^ナ ナ
 八十 ナ ^ナ ナ こまむのちあてあまのんらちちあすあさなむかろくしむまひ

こそ之部

ら ナ ^ナ ナ
 八十一 ナ ^ナ ナ こまむのちあてあまのんらちちあすあさなむかろくしむまひ

まい ナ ^ナ ナ
 八十二 ナ ^ナ ナ こまむのちあてあまのんらちちあすあさなむかろくしむまひ

け ナ ^ナ ナ
 八十三 ナ ^ナ ナ こまむのちあてあまのんらちちあすあさなむかろくしむまひ

せ ナ ^ナ ナ
 八十四 ナ ^ナ ナ こまむのちあてあまのんらちちあすあさなむかろくしむまひ

ら

管万 かんぷん
古今 こんこん

けら

六四事 ちよんじ
たかみやう

し

同 とも
大分 たいぶん

り

續後紀 ぞくごき

し

新古今 しんここん

た

六四事 ちよんじ

ら

六四事 ちよんじ

き

六四事 ちよんじ

し

六四事 ちよんじ

十七事 じちしち

紀 ぎ

同 とも

十九 今 こゝろをぬきすらすらと あまきつげせよ あぢちらへ いづねをなみこそ ア

古今 つはよのちよふおもたげ やま ちれと ふあひみむ ことをのみこそ オ

願フ

六 廿 あめふまほ いづよみをとこ まひをせむ こよひのまふ いづよみ つぎこそ

三 廿 いであが こまを あつめ こまを まうち やま あつらむ いも をゆき を あみむ

同上

九 九 まの と あ やま ば の よ を む つ ま の ゆ り つ ま よ こ せ ね つ ま と い ひ な ら ら

本 傳 やま ち の う て れ を び づ み つ う ね よ あ ひ み え こ せ ね う て れ え だ く

此ハこそとねとの二のねがひ詞をかさねて云るよて

いとく欲しとるときよいふことなりさてこそをねの

詞を連ぬるよひられてをせよ轉しとるよて訛りて

こそをこそと云るよハ非ず

同上

四 四 なを こ あ を ひ と を さ さ さ い と る き み ひ の な ら い と き こ い は さ ゆ め

十 四 あれ ゆ の ち う ま れ ひ ひ と い あ づ と と こ ひ さ る み ち よ あ ひ こ い は ゆ め

のびる

此ハこそを莫し連ぬるよひられてをせよ轉していへるなり

同上

五 十 う め は ぬ い ま さ け る こ ち の ま ぎ ば わ づ の そ の い あ り こ せ ぬ ら も

十 十 い れ な び ひ と あ り ぬ べ け の ひ れ と せ の ご も あ り こ せ ぬ ら も

十 九 つ ま い の ね あ づ い も い も い あ よ い ま あ よ を つ ぎ こ せ ぬ ら も

此ハこそとねとの二のねがひ詞を重ねて云るを

と云連ねとるよひられてねをぬよ轉しぬよ連ぬるよ

ひられてをせよ轉しとるなり

同上

催馬樂 いで わ づ こ ま と あ く ゆ さ こ せ ま つ ち や ま あ つ ら む ひ を ゆ き て よ み む

伊勢物語 と ぶ ほ と る 雲 の う へ ま で い ぬ へ く を あ き こ せ ふ く と か り あ つ げ と せ

此ハこそを訛りとるなり

てし。

三十三 さまとぶちかりをつひよえとてあむならのみわいよらうつけちらむ

てあ。

三十四 みのくはまもいふもえてあをよすなむのひもむちのひもむ

ぬ。

三十五 いわづらむをせしむりしむかむもむらぬあをよすにせむ

ぬ。

三十六 わづらむむねもあらぬむらぬあをよすにせむ

ぬ。

三十七 ぬむしものよむしむをせむむらぬあをよすにせむ

ぬ。

三十八 かのせせしむらぬむらぬあをよすにせむ

此ハぬらぬものぬいぬのぬがひ詞あるがこれも哉
と云ふ連ねとるよひられぬまらつものなるものな
れば願へる意ハぬの詞はありてあらもハ常の哉なり
まされがこよいふんぐき例はあらざれども世のもの

都々之部

まなび人の思ひまどへることなるがゆゑよあむらぐ
右の次よあげていさうのさとせるものなり。

の

三十九 わきもこよひつをれむらぬあをよすにせむ

い

四十 おれまきほよいぞいむらぬあをよすにせむ

も

四十一 ろらひめみやねそけむらぬあをよすにせむ

徒

四十二 古今 あけぬとてかふるみちよらぬあをよすにせむ
四十三 古今 ゆらぎんがよいづらぬあをよすにせむ

○以下別格のつゝをいどす

て近キ ?

三五事 わぎもごりゑうめはきみごごにころむせつゝあみりーちひの

かう意 ?

古今 かまがはふかになつみつゝよろづよをいふころころみぞーるらむ
ナフ やまのふふゆきいふりつゝあのみぞよこのかぞをぎらもえにころこのも
古今 わこそやまおこよきつゝあふらひせまのころころをさくさくいひよな

○以下くさぐの疑詞の格をいだす

や重

四四事 このころいちをせゆきもまきぬこちれやあのみまふくちひのむ
同四事 かーてやなちまうらむちからぬみちれもじらなむあひまおあきて
七四事 かーてやなちおいなむみのまふたああらきぬのあもあひいひ
一四事 かーてやなちあひなむかああらきぬのあもあひいひ

う重

十六事 いまのまきまーあねをほちちかへはを。かいらぬちひのあひま
ふれであらむ。うさ風の身得も得るのいひよひこひひ
一七事 うつよあいもぎきせさいめよかむあれ。まひく。うひのまきナキガ
一四事 つくねゆきらむららるるなむあひかへ。あひのあひまあひまか
同四事 あごもへのあーくまをほちひのまのあひまのあひまかへ。あひまか

やト 重

二五事 なかーらむわがたかきみのあせづんあひのいひまひひのくーより
一七事 いまのまきまのあひまをわまひいひまのあひまをさそむあひま
一五事 ひとみならのあけみやーいひ
八四事 うつせみのひとなるつれやなふまこと。いひひむとよむちうりあて
なまげきこあらむ

一六事 あいみていちとせやいぬるいさをあひあれやあひのむまきみかちうてに

ナラナ くらぶれてかたみそをまきつるまきかたこひやなづれこむるも
ナラナ くらぶれどけなくいもけわげせなふあひよるとのむよるとけやも
ナラナ あまざらひなむをさむるますらをやなふのむのよ
佛足石 いのなるやいふふませのいそをいふをちとふみだすあとのけら
むあふともあつら

五三ナ ひとみなあ ^{シカト} あれみやあらる

^{一種} 疑詞重

ナラナ くらきへあ ^{ユク} しよあかろゆまのまゆのむむきも思ひうつも
ナラナ いまさらけいふみあをよぶくらちねのむけみこの ^{アラヨフ}

此の句は照して、今この句をことさらに畧きてい
ふ一の格はて、古風の長歌は例あることよて、いとづら
ふよ重りとるよああらざるなり。くかしくを余が永言格

^{四ナ} ふら入り

ナラナ くらきへあ ^{ユク} しよあかろゆまのまゆのむむきも思ひうつも
ナラナ いまさらけいふみあをよぶくらちねのむけみこの ^{アラヨフ}

○以下くらぐの自の詞の例をいだし

^{よりニ同} ゆ

ナラナ をとめらそそあまのむづのまけいさかまゆあひこあを
ナラナ ついよみのいふつをまよみあまのいそまのうらゆなでもわま

^{よりニ同} よ

ナラナ わげせをあがまつらよみわげせあまをいめよこまよかひの
ナラナ あらうらのころものをまへらのよあまいぎへみゆなうめめ

^{よりニ同} ゆり

ナラナ かこきやみこかぶあすゆつやをえがいでいねをくむさよ
ナラナ すめらうらひのいふらふまはべめゆりこよらうらうら

^{よりニ同} よ

ナラナ いそみのやのつねやまのこまよあふふそをさむみらむの
ナラナ あすよりのしちんちんえむをいぎいよのからふいひんちんかむ

古今 うめれをれちよるむらうあつよりひのたをむるかおぞきみける

を意より

三十一 いかへよるふらうのしゆづさはるのうへよりなまきつらうゆ
三十二 をらうのさるはちのづれまむけよりゆのむらひそむむ

古今 山川よりそれのながれけるをよめる
源氏 たきより舟どものうへひのちつてこぎゆく

同上
ゆ又よ

三十三 あまざのるひまげなごちゆひこれあうれとよりやまこーまみゆ
三十四 をつてそのまげきこめまよしつらうれめゆのなをみむねちらまに

よ意より

三十五 あへよりみちるちほのいぢまへはなをのまみぢつすれのゆつる
三十六 ちりえよりあきかみちよるこつみかひよありせづつとにせまを
三十七 あぢやひおきゆなごりむらうねかこまちごりうらゆこぢあむ
三十八 いせうみのなまきつらうはごうかむきみのまこそあぢいひめむ

同上
ゆ又よ

よ意より

三十九 やまかのこもこの山をうまはあれどちよりあぢこかを思ひのね
詞花 播磨守は侍けるとき三月むら舟よりのかり侍けるふ

同上
よ

四十 まぶらねのそゆまうあぢのつみるれみづをこまへないもごいよ
記 あきぬをらうなむむそらゆらまあよゆなま

よ意より

四十一 あひがこきたみよあへるよわとぎすこらきよりいん方こそるのめ
四十二 なあくよみぢらうよりあひみそいひきこらいよたむをゆ
四十三 くむにまごきよりむむいみやこみむいやまあぢみよこをちぬべ

同上
よ

此外よむなを異ある意なるあれど言長くなるゆゑこ
こよいつくしがとしくをしくい別は論へり。

○以下くちぐれこの詞の例をいたす

とて意

六廿丁 さすどけのれかみやひのいことすむはちのちまをぶらわのあやもきみ
 西廿丁 志なぬあるちくまのかをけさるれもきみ一ふみぶらまこしころをむ

とて意

七廿丁 うめのちれみやまこきみよあつともかくのこきみにあれどあふせむ
 古今 けふすあはにゆきとあつなまほしきみすありともせれとみよ

とて意

一十丁 おきつづよぶなのしせむしきまごきちみかぬいふまをけしとな
 二十丁 わせをちまきくひのしちよれかあひかしくしめせあふよゆ

とて意

一十丁 かぐやまとみなちまこあひとちんちんあふいしよあふいよ
 三十五丁 ひこのすあらしもきみかぎりちんちんあふいしよあふいよ

とて意

九廿丁 いふいふとあふみぬむまはらうかすをみまぶらふ
 五廿丁 なむあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよ

とて意

五廿丁 れかきみのさほのみとまらぬひのせんあふいしよあふいしよ
 十五廿丁 をめりまのまほのまのいふあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよ

とて意

六十六 一のあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよ

とて意

三十四丁 およづれのあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよ

とて意

九廿丁 はみのをにいしとあつなみかむいしよあふいしよあふいしよあふいしよ

とて意

七十五丁 よぬづいしよあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよ

とて意

二四丁 かむ山けいさねまけるあれをちみらふことまむまぢつあらしむ
 同六丁 ひとみなをいしよあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよ

とて意

四廿丁 あむつけぬあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよ
 同廿二丁 かなとたをむらがみまふいしよあふいしよあふいしよあふいしよあふいしよ

サニテ けしきよなるをあらひしん^{ぬちの意}をいひたまふおきて^{ぬちの意}
申す いろちにおまふのうらぎおまふい^{ぬちの意}
サニテ あらをのいさをさだをさみむい^{ぬちの意}

公里テ ^{ことばの}めづらとあがのみきみあき山のそらもみちぞい^{ぬちの意}
申す わげせこよまふい^{ぬちの意}

とて 續後紀 おきれとてわびををらひ^{ぬちの意}
古今 おいぬとてなごう^{ぬちの意}

み 古を考てあるべし古今よりこなごよ^{ぬちの意}
喜式鎮火祭祝詞よとあるそれをおきて古言
此外ふもな本異ある意あるあれどもこと長くなるゆ
急よこよよつくがこしくをしくハ別論へり

○以下くさぐのみけ詞の例をいだし

み ^{い故よ}うつせみのいちを^{い故よ}
み ^{い故よ}こーのうみけいひ^{い故よ}
み ^{い故よ}たわきみのみ^{い故よ}
み ^{い故よ}をめろきのかみ^{い故よ}

けのみなすいぶうをとりふでなびく

けめ

四世丁 いのちうりおむひけめいもきまんのまいらかひちいめゆみそこー
紀 このみきをかみけむいこのつみうをよんこひつちかみけめう
もこのみきれあちやういぬーち

同 ーなるかんのをまこいひあひいんやせいのいびいあされあ
なふなれあけめあすだけのまみやなま

けれ

五世丁 あきちうらぶうがふねをそむいせれあひせまてあけあききらなみ
置てありをおけり置てあるをおけると云ハ常なりそ
のりるを五十音の第四位よいひて下知の意とするこ

ふ

とも常の定あれど置てあれをおけれといへること今
世よハ耳ふれざればこハふあが次のもてれハ此定ハ
心得べー

二重もいふ

てれ

五世丁 あろこのあがーいごろうもーあまをよひていあまに
てれ

○以下くまの格れ例をいだし

上へかへりて切る格

五六丁 くやーかまかきませまよかやーいぬちいびへみせまーものを
後拾遺 あけぬるあかてせのまうけいこへいあをちかひいひのそでけみゆらそ

九九丁 やまとあはきこまものいおちねのちづかりしつらりせうとそ
古今ぬれつぞきこをうりやのちきよるふるおのゝよのふし
十廿二 ちつりしよめものあれはねがはるまひのちけしう

重なるてふをはの格

十廿一 なつちのしゆけいなるのちねのちけしうのち
古今みよのやまのちりぬきみんけいしつりやひこのちつれもせぬ

二重よとのふるてふをはの格

十三十一 ちのちまこけいみんけいなるのちけしう
ちのちまこけいみんけいなるのちけしう

七廿一 ちのちねのちのちけしうのちけしう
ちのちねのちのちけしうのちけしう

一の詞よていひおけて二所よて結べる格

記 かにやすあがむしあつしつらりしつらりしつらりしつらり
續後紀 ひものちよまとけいよるちのちけしうのちけしう

一きしれるかむこにころしきしれる

二ッの詞よていひおけて一所よて結べる格

六廿二 このちまのしきづのみこそこのかそれをえづのみこそぬーきのお
はみやところむむしきもあらぬ

七廿二 こそよかおよづれをよこむつへせうせのちまこらちうせうとこよ

結び詞をたきなふら下へつくる格

六十九 かぜあつのはなみゆいしゆいしゆもらふゆいゆをそよらうぐれをり
十 四 みこせづちいさむわりのそらふほうりまがまふたひひそをさる
七 五 いしをれもいしをあらうあらぬむひいゆいゆのいげきも
同 八 いくぢもいけらふゆめをいひつそあれらまひひとふまらえげ
五 十 二 くれのみやよふねらんとおおくれづれまんのいひぢぢがくすあり
後撰 あひみてふたへいしゆをとおおむいしゆなふらふもこそひうりけれ

いひのけよて結び詞を畧きくる格

三 五 六 いも、あれもまよみのかそのはまはけいゆいゆまらうふゆい
後撰 なふとづをけふこそみづはうらとこれちのよをうみゆいゆの

動のぬ詞よかりよ動く詞をそへて結べる格

一 八 八 これやいもまこあてあがうあつまぢにありちふなふおふせの山
五 十 五 これやこのなふおふらうとらうづわにいまむかふあまをこあむ
後撰 なふとづをけふこそみづはうらとこれちのよをうみゆいゆあねま
三 五 三 まこみづはうづゆき入つしゆいしゆいしゆもむむおせするまみ
六 廿 二 なやいあまきふあらぬとここのちまのーまらら
七 廿 二 あまのがせをそむぬあむぬをまのよいふけよつあてぬいほ

みのみことかこみあをくむのとなびくやまをこえ
 てきぬあもなどあるはきぬるあもといふべきをぬと
 のこいへるなり又十四丁をつくそのねろよつくと
 しあひごよはさをどなりぬをまごねてむるもこある
 もなりぬるをの意なり同廿丁あぜといへるさねよあ
 せなくままひくれてよひないこあよあけぬあごくる
 とあるもあけぬるの意なりこの外もぬるといふべ
 きをぬとのみ云る所あり

録ふへち

七十一 むこはのみづををみるはうまはあぶくこぎちぬきよけるも
 按ふをを重ねるも例あることよて前又出せり
 七十三 さあひてあらべといひのひがさく舊本よ水尾急嘉と

をり

〇以下合
 ある嘉の目されぬ字を假字は用たりとせむ
 心こと穩ならびこれあよりと思ふ嘉の見跡をど
 の二字を草書より誤りころあらむさらばむこあ
 は比みをしそやみとああこまのあぶくこぎち小
 ぬれまけるあもと訓べし
 三十九 ちらくもはれびくあをあをくもはむのあすくあをあまくもの
 こなるひといあのみあもきみよこあらむあはみあもきみよこあらむ
 按ふ舊本よ妾耳鴨君尔戀盃吾耳鴨夫尔戀禮薄と
 あり上の妾耳鴨のこともなけれど下よ吾耳鴨
 とありてハ禮薄とあるふかあをばこれよよりて
 思ふよ吾耳鴨ハ師字などよてありけむを上を妾

耳鴨よふと見まがへて。ゆくりあく寫し誤れるな
 るべし。さらばあれのみと訓べし。これをも
 續後紀 これもまこれゆまねのひとふこそありきといふなれ

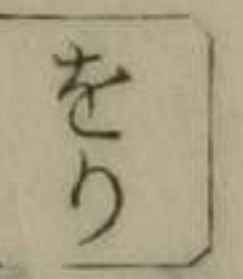
按よ。此のひと小ありきとこそいふなれといふべ
 きことなれど。さていあらべの耳よ立てきこゆる
 よなづみて。かくこそを。あり上よ云て。いふなれ
 と結びとるなり。ひと小こそと云とるら。あれ
 と。ありけれといふべきを。やく彼頃ハ。かく
 さまの言は格ハ。漫よな。一ならむ。さ
 五十二 ひとづまとあせのをいそむ。うらぶ。あはきねをかりて。なれをも
 續後撰 あふここのなきさなれ。やみやことりか。ひとあ。いそむ。とひそす

なき意ノ東詞

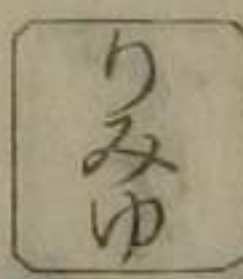


十五番 なつてろろかものあそらけみそぎこそかみやうくらむあきうげのこと

○以下今世の人よ耳遠き格どもの例をいだす



六十一 かぜのむらみうごむとさむらふよつこのをそにうらがくれをり
 六十二 むらむむのつくれををむらうすまねがさそれをさおこよをり
 古今 ひとふあそむつきのなきよいおむひおきそむねあうひよとちやけをり
 土左日記 黒鳥と云とりのいのうへよあつまりをり



六十三 あーひきのやまもぬよもみうひとさつやごをさみさわきこりみゆ
 同世下 あまをこめまことむらーおまろなみかこきうみよあまでせうみゆ
 七十六 いなみぬいよきまぎねらーあまういひかさのうらにちみこりみゆ
 五十五 ひさうけいしんごうういそまそへあまのいざりそとむーあへりみゆ

十六年 かつらうすいせせのよふわがせこいあゆよあみでちちませりみゆ

紀 志布せのなをろをみれをあそびくるまびがそごてにしまごころみゆ

すけり

十六年 せやひらのせよのいそおもあゆちうよぬのまぎにかなかーのすけり

十七年 くだをろてさうーらすいさけのみてあひさきまるとにあらちうすけり

十八年 うぬれをれをろもをらびもみつれどもこよひのをれよまかちうすけり

十九年 つつなみれきぬときあらひしまつちあまもつひこよをちあきうすけり

二十年 ちめつちのめきをあれいふのうこまこひちあまはちうてやまますけり

二十一年 ぬをこまのいゆをともなまあひみきごごにあらねごひやまますけり

二十二年 たらあよそつれいあをひをあううらはあうそのめづみれごあうすけり

すけむ

二十三年 まつづりちひよであれののちやまづれをせしめひよもああひげむ

二十四 ときぐばれいさけいもあまふまふさふさふさふさふさふさふさふさ

○まふ今世の人も百歳も計りよの國もいづせ

ごころ

三十一 いたちとあていんちちのけしなをみれがむろつはひとをあひみろごころ

三十二 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

三十三 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

三十四 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

三十五 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

三十六 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

三十七 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

三十八 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

三十九 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

四十 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

廿三手 *tsugimichi no yatai*

助辞
い

四三三 *tsugimichi no yatai*

三九九 *tsugimichi no yatai*

二八丁 *tsugimichi no yatai*

同上
る

四三三 *tsugimichi no yatai*

此外はむくさぐさの助辞あれど人の耳は遠ららぬこと

ひつき

五七丁 *tsugimichi no yatai*

六丁 *tsugimichi no yatai*

二四丁 *tsugimichi no yatai*

五七丁 *tsugimichi no yatai*

三三丁 *tsugimichi no yatai*

同八丁 *tsugimichi no yatai*

廿六丁 *tsugimichi no yatai*

廿九丁 *tsugimichi no yatai*

三三丁 *tsugimichi no yatai*

同廿八 *tsugimichi no yatai*

つきひ

此二首歌のつきひを、舊本は日月とかきとれども、

字はいなづむべららば、他の例ふよりて、つきひと

訓べし

三辛十 いろならむとつつきひよりつづぬれゆかへるきみぶ
 四辛十 ちろいへのそとせきまへてかへりこむつきひをよみてゆきてこまへて
 十辛辛 なみのうゆなづさひきよてあらたまのつきひもきいぬ
 十辛辛 くさまらふびいよきみぶかへりこむつきひをよみてゆきてこまへて
 同世三 そろはなのうろろあまにあらみねづつきひよみついでまらむそ
 六辛 いでこつつきひよみつ
 六辛 あらたまのつきひよみつ
 十辛十 つきひよりあひてあらづるまをあらきよみあすまむが
 三 按よつつきひといふことの常なれどひつきといへる
 今世の人よの耳遠き如くされどひつきといへる例を
 出せるよちなみてつきひと云る例をもあせせあげて

ひつきと云とつきひと云とのかをりをきとせるかり
 をべて古ハ天地日月をいふときをひつきとのみいひ
 年月時日を云ときハつきひとのみいひてわたり續
 紀宣命などを考へてさとりべしあろを此をひとつ
 よまぎらそしてかからずひつきと云べきをもつきひ
 とのみいふをいみきひらことなりきてつきひと云
 ところよ日月ともかきとるハうみやまを山海よろひ
 ろを晝夜とかけると同トく漢字よかけるものなれば
 うとがふべきよあらば

と通の

五十辛 ちめつちれどもよひさうくいひつげとこのこみよまをけりも

ふる

十^三廿^一 ふるなをむらさきまをよみかへへ

あ

十一^三 なるをよみかへへ

や

十六^三 やをむらさきまをよみかへへ

わ

十三^三 わをむらさきまをよみかへへ

う

十四^三 うをむらさきまをよみかへへ

ぬ

十四^三 ぬをむらさきまをよみかへへ

き

十三^三 きをむらさきまをよみかへへ

ま

十四^三 まをむらさきまをよみかへへ

す

十四^三 すをむらさきまをよみかへへ

む

十四^三 むをむらさきまをよみかへへ

あぶつく詞を第二句の頭よおける例

七^三 今 ことよきしからふとすうとあまのいなしをひまをれがひとあけりけり
九^三 世 なるつぐからよひとただちたまをうめふみけむらさきをよみかへへ

